

焚いてしまふ

原民喜

青空文庫

紀元節に学校の式を休んで、翌日もまた学校を休んだ。すると、その晩から熱が出て、風邪の気味になった。私は二階の一室に一人で早くから蒲団を被って寝た。ふと、目が覚めると畳の上に白紙のやうなものが落ちてゐる。それは雨戸の節穴から月の光が洩れて来てゐるのであつた。私はわざと腕を伸してその光を掬つてみた。それから窓を開けた。もう夜明けらしく、月は西の空に冴えて居て、ひえびえとした大氣が、屋根の霜とともに肌に迫つて来た。私は寢衣の襟をひらいて、胸一杯さらけ出した。もつと病氣が重くなれと云ふやうな自棄氣味が、ふと月の光によつてそそられたのである。

その日は昼前から熱が出て、それに咳なども加はった。私は階下で食事を了へるとすぐ二階の一室に転げて暮した。四時頃になると、西日がガラス戸一杯に差込んで、三畳の部屋は温室のやうに暖かになった。私は日の光に曝された蒲団の上で、本などを讀んだ。

次の朝も早くから目が覚めた。すると、昨日と同じく畳の上に月の光が洩れて来た。額に手を置くと、熱く火照つて居る。私は始めて、自分の病態の進んだのを後悔した。と云ふよりは妙にもの侘しく切ない氣持がした。そろそろ窓を開けると、やはり西の空に月は皎々と照つて居る。何故、冬の月は朝になつてもあんなに燿^{ひか}るのだらう。私は寢衣一枚で窓側に立つて慄へて居た。

一週間程して私の熱は下った。私は階下の炬燵にあたって暮した。母はもう明日からは学校へ行つてはどうだと云った。私も幾分そんな気になつて居た。もう休みたいだけは休んだのだと思つた。

だが、次の日も意気地なく休んでしまった。私は訳のわからぬ憂鬱を感じた。庭に出て薪を割つてみたが、気は紛れなかった。

私は二階に閉籠つて、日記帳を取上げた。

「こいつを焚いてしまはう。」

「こんなものがあるからいけないのだ。」と私は呟いた。

私は日記帳を提げて風呂竈のところへ来た。風呂の火に投げ込むと、日記帳は見るまに脹れて来た。やがて頁々がくるくる焦げ

て巻かれて、心に火が徹って行つた。私のこの正月以来の日記が焚かれてゐる、詳しく書いた頁が燃えて居る。ふと私は妙な氣になつた。

(×月×日、夜姉を停車場に送り、歸つて床に寝転んで、ゴオゴリの「死せる魂」を読み耽つた。)この一節がふと思ひ出されたのである。別に意味もない部分ではあるが、あそこもう煙になつたかなと想はれた。

——中学三年の三学期のことである。

青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日

入力：蔣龍

校正：小林繁雄

2009年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

焚いてしまふ

原民喜

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>